

Title	Sensibility, Sentiment, and Passion : The Romanticism of Maria Edgeworth, Charlotte Brontë, and Emily Brontë
Author(s)	片山, 美穂
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49125">https://hdl.handle.net/11094/49125</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	かた 片	やま 山	み 美	ほ 穂
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)			
学位記番号	第 2 1 7 0 4 号			
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科英文学専攻			
学位論文名	Sensibility, Sentiment, and Passion: The Romanticism of Maria Edgeworth, Charlotte Brontë, and Emily Brontë (感受性、感傷、情熱——マライア・エッジワース、シャーロット・ブロンテ、エミリー・ブロンテのロマン主義——)			
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲			
	(副査) 教授 森岡 裕一 准教授 服部 典之 准教授 片渕 悦久			

#### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19 世紀初頭から中期にかけてイギリス文学界で活躍したマライア・エッジワース (1767-1849)、シャーロット・ブロンテ (1816-55)、エミリー・ブロンテ (1818-48) の 3 人の女性小説家を取り上げ、これらの作家が、18 世紀後期から 19 世紀にかけて理性重視から感情面への関心が高まる時代へと大きな文学的・思想的転換を迎える思潮のなかで、感受性・感傷・情熱の問題をみずからの文学作品においてどのように取り組んだのかを解明しようとした研究である。論文は、序章、本論 6 章、および結論から構成されており、全体で英文 171 頁、和文 400 字詰め原稿用紙に換算しておよそ 450 枚の論文である。

序章では、18 世紀後期から 19 世紀前期にかけて感情に重きが置かれるロマン主義の時代へ移行する文学界の動向を、感傷小説やゴシック小説の隆盛等にも触れながら、その輪郭を描出し、この時代の文学者、特に女性作家にあっては、この感情に関わる感受性・感傷・情熱への傾斜、および理性と感情との葛藤は不可避の重要な問題であったことを説き、3 人の女性作家を取り上げる根拠を説明する。

第 1 章では、主に 19 世紀初頭に活躍した女性小説家マライア・エッジワースを取り上げ、その代表的小説『ベリンダ』(1801) にあっては、主人公ベリンダの結婚にいたる過程の描写において、表層的には理性に重きを置く姿勢を貫いて最後は幸福な結末を迎える女主人公に光をあてているように見えながら、その一方において、副女主人公ともいえるヴァージニアが父性的男性に愛情をいだき破滅にいたる描写のなかに、感受性が理性に激しく抗おうとするベクトルが内包されていることを説き明かす。

第 2 章では、シャーロット・ブロンテの代表作『ジェイン・エア』(1847) を取り上げ、ジェインとロチェスターが結婚へと発展してゆく状況のなかで、ブレンシュ・イングラムという若い女性が登場してはやがて消えてゆくという描写に注目し、この白色を表わす名前をもった女性とロチェスターの狂気に陥った黒色の肌をもつ妻バーサとの照応関係を考察する。

第 3 章では、シャーロット・ブロンテの次作『シャーリー』(1849) という小説は、19 世紀初めに起こった紡績工場破壊運動というきわめて社会的な問題を背景に二組の男女の結婚を描くという社会小説とロマンス小説とが一つになった小説であることをまず明らかにした上で、妖精物語が描き込まれている意味を考察している。このロマンス

的ジャンルとの混在が、二人のヒロインのうちの一人キャロラインの内面に潜む情熱の存在の大きさを浮き彫りにするベクトルであると説く。

第4章は、実質的にはシャーロット・ブロンテの最終作である『ヴィレット』(1853)を取り上げ、修道女の埋葬というゴシック的モチーフは、この小説では女主人公ルーシー・スノウの情熱の抑圧と解放のメタファーとして機能していることを説き明かす。

第5章は、エミリー・ブロンテの小説『嵐が丘』(1847)を対象にする。男主人公ヒースクリフに窺われる生き埋めのモチーフは、ロマン派的なテーマに結びつくものであって、ヒースクリフとキャサリンにおける、死においてのみ可能な他者との合一を希求する情熱のメタファーになっているのではないかと主張する。

第6章は、エミリー・ブロンテの詩作品のなかから、子殺しを詠った詩を取り上げ、一見母性を否定するかに見える詩において、死を通して母なる大地への回帰を求めるものが窺われ、ここに他者なるものと一体化しようとする自我の情熱が表象されているのではないかと主張している。

結論においては、マライア・エッジワースとブロンテ姉妹は、ロマン主義以前の理性偏重の思潮が残存する状況のなかであって、次第に大きな比重を占めてくる感受性や情熱などの感情の世界を程度の差こそあれ敏感に感じとりながら、この大きな二つのベクトルの相互作用のなかからテキストを生産していったのであると結論づけている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、19世紀前半のイギリス文学界において重要な位置を占めているマライア・エッジワース、シャーロット・ブロンテ、エミリー・ブロンテの3人を取り上げ、おのおのの代表的な小説・作品が孕んでいる意味を、理性と感情の相克という大きなテーマ的パースペクティブのもとに捉えて分析したスケールの大きな研究である。この分析により、各作品が、その感情的側面の表象において、それぞれ独自の表現のかたちをとり、また独自のテキスト構造を形成しているありようが明らかになり、感情の抑圧、感情表象の歪み、理性との葛藤の複雑性がより一層浮き彫りにされ、このテーマのもつ重要性があらためて確認されることになったのは、本論の大きな功績である。またエッジワース『ペリнда』のヴァージニア、『ジェイン・エア』のブラーンシュなどの脇人物や、シャーロットとエミリーの小説や詩に窺われる生き埋め、埋葬、死のモチーフなどへの注目・考察に鋭い文学的洞察が確認できるのも、本論の興味深い点である。

ただし、本論文において問題がないわけではない。まず、感受性、感傷、情熱の間の相違面・共通面がやや不明確であるため、論旨の理解を妨げる部分がある。これらの概念規定をより一層明確にすべきであろう。また、理性に対する対抗姿勢を指摘し、感情・情熱面を強調するあまり、議論が図式的になり、論の枠組みを外からはめ込んだような展開に陥る傾向があるのが惜まれる。さらに、エッジワースのほかの小説、ブロンテの末の妹アンの小説、ジェイン・オースティンらの他の作家の小説への言及があれば、本論が一層説得的になったであろうと思われる部分もないわけではない。

しかし、それらの点は望蜀のごときのものであって、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。